

## 第十二回「公德文芸賞」の入賞作決まる

八代高校が三部門で最優秀賞

高校生を対象にした第十二回「公德文芸賞」（一般財団法人熊本公德会、熊日共催、県高等学校文化連盟後援）の入賞者が決まりました。四部門のうち三部門で八代高校の生徒が最優秀賞に輝きました。

今回の応募作品は千八百四十五点。俳句と肥後狂句で全体の九十一%を占めました。部門ごとに最優秀賞一点のほか優秀賞、入選を選びました。選者は短歌・塚本諄、橋元俊樹、俳句・岩岡中正、星永文夫、肥後狂句・野方正治、自由詩・丸山由美子の六氏。

表彰式は平成二十七年十一月二十八日、熊本市上通町の熊本公德会カルチャーセンターであり、最優秀賞に輝いた四人には盾と賞状、副賞の図書カード、優秀賞の十九人には賞状と副賞が贈られました。

最優秀賞の四人が、それぞれ自作を読み上げ、作品への思いなどを披露した後、部門ごとに各高校の先生や審査員をまじえて意見交換をしました。最後に審査員が「言葉の力を大事にしてほしい」「家族をテーマにした作品も見てみたい」などと講評しました。

受賞者名と、作品・選評（最優秀賞、優秀賞のみ）は次の通りです。学校、学年は昨年十一月の表彰当時です。

### 【俳句部門】

#### ▽最優秀賞

夏の海方程式を砂で解く

八代1年 平山 翔

【評】盛んな夏と元気な若人という取り合わせに対して、この句は「方程式を砂で解く」という意外な発想が楽しい。砂の上で数式を解くというはかなさもまた、青春らしい。砂に書いては消える数式。どこか青春のアンニュイもあって、なかなかスマー卜な句である。（岩岡）

#### ▽優秀賞

単語集端の汚れて秋深し

信愛女学院3年 高田 紗椰佳

【評】ずいぶん読んで学んだ単語集であろう。「端の汚れ」がそれを物語る。それを手にしながら「よくやった」の充実感と、近まる入試の前に「まだ・・・」の不安感とがまじる。「秋深し」がそのすべてを映して、感慨深い。（星永）

制服を着れば背が伸びる春の風

信愛女学院3年 濱田 夏樹

【評】いかにも発育ざかりの、高校生気分まるだしの詠。衣替えで昨年の制服を引っ張り出して着てみると、もう丈短か。「あゝ・・・」の溜息も「まあいいか。春だし・・・伸びたんだし・・・」明るく笑う。その素直さがいい。（星永）

入道雲見ると無性に走りた

九州学院3年 東 ほのか

【評】これも高らかな青春の詠。時は夏、むくむくと湧き、盛り上がる入道雲を見ると、こちらにも力が湧いて来て、無性に走りたくなくなるという。まさしく青春バンザイの高揚感、その元気を買う。(星永)

希望という線香花火に火をつける

水前寺高等学園2年 中村 美咲

【評】〈希望〉が〈線香花火〉という、何とささやかな〈希望〉だろう。だが現実には、そんな青春も多い。「火をつけ」ただけでも、見事というべき。青春の今一つの有様を見せた、その俳句姿勢に声援を送る。(星永)

炎天下ここが私の正念場

球磨工業3年 伊東 準平

【評】部活の練習の一場面か。炎天下のグラウンドで、もうヘトヘトになりながらも、「ここが私の正念場」と立ち上がる、その逞しい根性。これも一つの青年像である。気合の入った作品といえよう。(星永)

## ▽入選

古閑壮馬(第二2年) 亀田梨沙(尚綱2年) 酒井夢(信愛女学院3年) 野津原詳子(信愛女学院3年) 原野伊澄(信愛女学院3年)

【総評】今回はもう十二回、俳句部門は回を追うごとに作品の質も量も向上してきていて、何より頼もしい。今回は、とくに、高校生らしい実感のある佳句が寄せられて、楽しく選考した。他方、応募作には、高校生にしてはやや幼なすぎる言葉づかいや発想のものもあって、残念だった。俳句という文字はたしかに日常平俗のうたが楽しいのだが、少なくとも創作に際しては、ちよつとあらたまつた姿勢が求められるだろう。俳句は出来るときは瞬時だが、それに至る凝視と熟慮の時間も大事だ。

優秀賞では「単語集」や「制服」の句に高校生の生活実感があり、「入道雲」「希望」「炎天下」の句に若者らしい情熱がある。どれもものびのびと作られていて好感がもてる。

入選句では「ばあちゃん」とや「夏山や」の句に素朴な人柄が感じられ、「新盆や」「小鳥来る」「青空を」の句に、大胆で新鮮な感覚を見た。

今回は、信愛女学院がその質の高さで上位を占めた。他の高校も奮起して、質のレベルで切磋琢磨してほしい。(岩岡)

今年に応募作品が少し増えたという、まことに嬉しいことである。この勢いが来年にもつながるよう祈るばかりである。

もっとも作品の質でいうと、例年どおり、部活・宿題・蝉・花火・そして恋にかき水などの句が多く、それに宿題だから仕方なく作ったの姿勢もあって、いまいちの感がある。

ただその中で、今年は注目すべきことが二つあった。一つは、入選作にある「ばあちゃんとかぼちやの煮物夜は長い」や「夏山やいびつな父の塩むすび」のような、家族を題材にして、ほのぼのとした愛のかたちを見せてくれたものがいくつもあった。これは例年にないことで新鮮であった。

いま一つは、最優秀賞作を初め、青春の自画像を鮮明に描いた作品が例年になく多かつたこと。それも切なく、強く、逞しくと多様で〈青春群像〉を観る思いがした。これらもまた来年に受け継がれ、成熟してくれたらと祈るばかりである。(星永)

### 【短歌部門】

#### ▽最優秀賞

シャツターを切っても時は止められず友の笑顔と夏の青空

八代3年 吉村 瑞樹

【評】「友の笑顔」と「夏の空」はある意味で青春を象徴するもの。長い人生の出発点とも、通過点とも言える高校生活の一面を活写している。上の句の捉え方と下の句の措辞が巧く合致し、本質を見つめる眼差しが感じられる、さわやかな歌である。(塚本)

#### ▽優秀賞

思い出が忘れないでと手をのばす桜の花の香るあの頃

第二2年 村上 裕香

【評】桜の咲く頃に作者には忘れられないことがある。それで、桜の季節になると作者はその思い出に浸るのである。「思い出が手をのばす」と思い出を主語にした表現が新鮮。また桜の「咲く頃」ではなく「香る頃」としたのもよい。(橋元)

ほととぎすつくつくぼうしキリギリスもうすぐ一年が過ぎていくなあ

第二2年 中島 健太郎

【評】春、夏、秋を、その季節の鳥や虫で表わした着想が素晴らしい。結句の「もう一年が過ぎていくなあ」という感慨の表現も、若々しい口語で成功している。(橋元)

日曜の朝をあつめて飾っているあたしは藻類太陽はきみ

濟々巒2年 河野 瑚乃美

【評】新鮮な感性が潜んでいる歌で、内面の思いを下の句の具体に託している。

「あたしは藻類太陽は君」の比喻が面白い。謎めいた響きがあつて、脱出願望のようなアンニュイ感が漂う心理をそれとなく覗かせる。(塚本)

夏祭り喧騒広く下駄が鳴る揺れる衣に咲くは朝顔

九州学院3年 福田 風沙

【評】「夏祭り」に浴衣を着、勇んで出掛けたときの歌で、おそらく薄暮の時であろう。祭りが最高潮に達する前の、三々五々人が集う雰囲気は良く出ている。とくに下の句の表現が印象鮮明で、「朝顔」が効果的。(塚本)

「だごうまか」頭に浮かぶ生まれ故郷採れたてトマトとおばあちゃん

尚綱1年 森田 愛加

【評】故郷を思い出すとき頭に浮かぶのはおばあちゃんの作ってくれた団子である。それ

と採れたてのトマト。最後が字足らずなので「ばあちゃんの顔」としたらよかった。  
(橋元)

#### ▽入選

蓮池史弥(八代3年) 溝口香菜(球磨工業2年) 松村直紀(文徳1年) 池田宗也(八代3年) 古荘沙也香(城北1年)

【総評】応募数は前年に比べてぐんと減少したが、新しい高校からの応募があり、その点は広がりを見せていると言えるだろう。指導していただく先生の指導力に与かるところが大きいと痛感するが、作品の多寡よりも、その内容・質をこそ問題にしなければなるまい。短歌というものは、万葉集以来からの日本の長い伝統詩型なので、若い皆さんは「古めかしい」「堅苦しい」「難しい」などの印象があるかもしれないが、新しい風を吹き込んでくれるのは、どの世界もいつも若い人である。

指導いただく先生もいっしょに作って頂きたい。そして、この文芸賞を熊本県の“短歌甲子園”にすべく多くの高校生からの挑戦を期待したい。(塚本)

今年は短歌の応募数が減ったせいか全体のレベルがいま一つと言う印象だった。学校でまとめて応募という形が多いためか、個人的な、例えば家庭での日常や、家族を詠んだ歌がほとんどない。高校の学校生活はそれなりに解り面白い作品もあるが、大半はパターン化されている。ないものねだりばかり言うようだが、現在の、あるいは近い将来の自分をみつめる歌を期待するのは無理なのだろうか。(橋元)

#### 【自由詩部門】

##### ▽最優秀賞

「カウントダウン」

夢から覚める、三秒前

瞼の裏には黄金色の日差し

耳の奥には呼応する雄叫び

夢から覚める、二秒前

指先には銀の雫のつめたさ

口元には別れの笑みの名残

夢から覚める、一秒前

足の先には湿った土の感触

胸の内には固い決心の重み

夢から覚めた、その一瞬

瞳のガラスには新しい世界

さようなら、そして、おはよう

【評】とびぬけて切れ味の良い、しかもたくましい詩でした。  
新しい一日のはじまり、その一瞬一瞬の近づく意識の感覚。無駄なく抑制された  
目覚めへのカウントダウン。けれども強烈な歯切れの良さで伝え切った我一人の詩。  
終連終業の言葉は声で。

### ▽優秀賞

「小さな幸せ」

朝起きてご飯食べ  
学校へ行く  
勉強して友達と話し  
家へ帰る  
そんな繰り返し毎日の  
でも見つけた  
小さな幸せを  
時々会う  
お寺のおばさん  
その人に会うと幸せになる  
一日が幸せになる  
「おはよう」  
その一言で

尚綱2年 野口 実奈

【評】控え目に書かれた気持の素直な詩です。  
人と人とのほほ笑み合いが具体的に書かれていることで、読む者を幸せにしてくれ  
る名画の一篇。人生の日々の、虹のような「小さな幸せ」の存在を、そのポエジ  
ーを大切に思います。

### 「危機」

油断していた  
いきなり奴が襲ってきた  
逃げ出せないこの状況  
連絡したいがスマホがない  
無理矢理逃げ出したいが  
バレたらどんな目に遭うか分からない  
どうしたものか  
周りに誰もいない状況で  
いったいどうするべきなのか  
私は君に謝りたい  
これからは君を気にしよう  
もう君がいることが  
当たり前だなんて思わないから  
許してくれよ

【評】おかしな詩です。表題が良いですね。あり得ない状況、苦境を楽しむ詩的精神力の強靱をバネにして、一篇の歯切れの良い詩が、颯爽と立ち上ってきます。

「湖が海でないという個人的証明」

生まれて初めて湖に行った時  
対岸も見えないような雄大さ、透き通った水の青さに私は震え、こう嘯いた  
これは、まるで本物の海と同じじゃないか  
思わず靴を脱ぎ、裾を捲りあげ、水の中へ一歩踏み出した時  
脚をぬぐうただただ綺麗な水に私は絶望し、すぐ分かった  
こんなもの、海であるはずがないじゃないか

確かに、湖は海の美しさとよく似ている  
しかし、湖には穢れが決定的に欠けていた  
この世の循環の始点にして終点  
すべての生き物が生まれ、死にゆく場所  
46億年分の穢れをため込んだ汚さは、湖のどこにもなく  
ただ空虚に肌を撫でていく波は、まとわりつく海水の不快感とはどこまでも無縁で  
海のような何かの中で立ち尽くしながら、私は海を恋しく思い続けた  
記憶を吹き抜ける潮風は、何か死体の匂いがした

濟々巒3年 米光 海人

【評】〈個人的証明とは〉とは、〈感覺的証明〉。

散文的、理詰め、理屈の理屈で詩的思考を硬直させないように。終行の美しさを大切に。それにしても、大きなテーマを書ける文章力はたいしたもの。誠実な詩編です。

「石ころみたいな僕」

僕は石ころ  
たくさん転がっているよ  
それなのに  
誰も僕を見たりしないや

青い石だったらよかったかな  
赤い石だったらよかったかな  
素敵な言葉と一緒に  
店先に並べられて  
きっとみんな僕のことを見てくれるんだ

僕は石ころ  
世界に埋もれているよ  
それなのに  
この世界にいないみたいだ

輝く石だったらよかったかな  
特別な石だったらよかったかな  
素敵な言葉と一緒に  
誰かのお守りになったり  
きっと僕だって誰かを守ってやるんだ

でこぼこさ  
色だって綺麗じゃない  
そんな僕に誰も気づかないけど  
僕はここにいますよ  
なんの変哲も無い  
ありふれた歪な石だけど  
僕はここにいますよ

第一三年 上藤 梓

【評】全五連〈僕〉の声での会話体、創作詩です。

僕の声でまとめられた詩の全文から、あるがままの作者の言いたいことが、しっかりと伝わります。終連の〈僕はここにいますよ〉の八文字は、切ない八文字です。

「私の中の私たち」

遠くを見つめた彼女は言った。

「どうせ、私は何もできない」。

とあきらめたように。

腹を立て、腕組みした彼女は言った。

「なんで、私がおんな目に会わなければならぬ」。

と怒鳴りながら。

耳をふさいだ彼女は言った。

「ごめんなさい、私がいなければ・・・」。  
と消えそうに。

優しい彼女は言った。

「大丈夫、私は信じているよ」。

とあたたかく。

前向きな彼女は言った。

「できる。きっと私はできる」。

と力強く言った。

すると一人の彼女は言った。

「そんな彼女たちの声をどう思うかい」。

それらを聞いていた私は、

左胸に手をあて、

きこえてきた声に

耳をすまし、口をひらいた。

「私は・・・」。

尚綱1年 馬場 優花

【評】表題を「私の中の私たち」として下さい。

私の心の中に隠れ住んでいる私の分身たちの声に耳をすませている詩人の私。

七連から聞こえる七人の率直な本音。

詩的思考の素晴らしい詩編です。

### ▽入選

雪田明日海（九州学院3年） 田中悠佳（尚綱1年） 牛塚広貴（球磨工業3年） 富永光（球磨工業2年）

【総評】今回の自由詩部門の応募数はなんと19点。これまでと比べて激減してしまいました。

けれども、少数とは言え、その一篇・一篇の詩は上質の詩が多く、安心して審査を楽しませてもらいました。

詩の基本は、世の中でたった一人の人間として、自分の思ったままを、感じたままを素直に書くことです。

一番嬉しがつているのは、19人の高校生の心の小道かも知れません。

あなたが書かなければ、誰も知らないままに閉じてしまうただの地面の運命ですもの。（丸山）

### 【肥後狂句部門】

#### ▽最優秀賞

やっぱ友達 流す涙も同じ量

八代3年 鬼塚 遼汰

【評】喜びも悲しみも共有してくれるのが友達。特につらく、悲しいとき、一緒に涙を流してくれる友はかけがえのない存在だ。涙の量が同じという表現が光っている。

#### ▽優秀賞

壁ドン やるにはつらか身長差

球磨工業2年 高木 弘之

【評】壁ドンをやるには、男性が背の高い方がいいのだろう。でも、やっぱり背丈ではな



く、気持ちの問題であることを肝に銘じよう。

やっぱ友達 同時にライン「なにしてる？」

尚綱2年 野口 実奈

【評】二人が同じ気持ちでいることを詠んだ句。双方の苦笑いする姿が目にかび、ほほえましい気持ちになってくる。

そろそろ 睡魔が襲う5時間目

尚綱2年 上原 未来

【評】昼食後の授業は睡魔との闘い。どんなに眠るまいと努めても自然と寝てしまう。だけれどもが経験することを素直に読んでいる。

壁ドン なんのどんぶり父が聞く

城北1年 大城 匠

【評】世のお父さんたちは、流行についていけないことも多い。世代間のギャップを突いた句。

### ▽入選

市村元（九州学院1年） 田中偉雄里（城北1年） 東矢伊織（尚綱1年） 有田智哉（球磨工業2年） 岩吉知茉（甲佐3年）

【総評】肥後狂句には、七百九十七点の応募をいただきました。昨年よりも百二十八点ほど減りました。それでも多くの若い皆さんに肥後狂句に関心をもっていただき、肥後狂句人口が高齢化する中でうれしい限りです。

入賞作品はレベルが高く、甲乙つけがたいものばかりでした。みなさんの鋭い観察眼、豊かな表現力には新鮮さを感じました。その中で最優秀句には、「やっぱ友達 流す涙も同じ量」を選びました。「涙の量が同じ」という表現に、友達がかけがえのない存在であることを実感させてくれます。

一方で、字余り、字足らずの句も多く見られました。字数は短文芸の基本です。難しいルールではありません。肥後狂句は、笠（題）に十二文字（十二音）で付け句するものです。基本は七五調ですが、五七、六六でもかまいません。笠にまつわる場面をイメージし、どう表現するかを考え、作句してください。この作業が考える力を育てていくと信じています。（野方）